

はじめに

『無痛文明論』は、雑誌『仏教』に、一九九八年から二〇〇〇年にかけて連載された。雑誌連載後、本文を完全書き改め、第七章と第八章を新たに書き下ろして、単行本『無痛文明論』とし、トランスビュー社から二〇〇三年に刊行した。従って、無痛文明論の決定版は、後者の単行本である。ただ、雑誌連載版の文章の愛読者も多く、また単行本に書き改めたときに、どの部分に手を入れたのかを確認できるようにしてほしいという声もあったので、森岡全集の一巻として『無痛文明論・雑誌連載版』を刊行することにした。森岡全集に収めるにあたっては、本文には一切手を加えなかった。

目次

第一章	無痛文明論	1
第二章	無痛文明における愛の困難	24
第三章	無痛文明における自縄自縛の構造	49
第四章	暗闇のなかでの自己解体	72
第五章	身体の欲望から生命の欲望へ	114
第六章	自然化するテクノロジーの畏	137

第一章 無痛文明論

1 「無痛文明」とは

いまの社会に生きていて、なにか息苦しい感じに襲われるのは、私だけではないはずだ。たしかに物はあふれているし、日本にいるかぎり、戦争で人々が大量に殺されるといふこともない。でも、この息苦しい閉塞感は何なんだろう。なぜ豊かな社会になったのに、人々は顔を輝かして生きていないのだろうか。

何不自由ない家庭で育った子どもたちが、なんとも言えない不安に襲われて刃物を他人に突きつけたり、お金に困っているわけでもない少女たちが、援助交際という名の売春で自分の肉体を傷つけようとするのはなぜだろうか。

いつの時代でも、子どもは、社会がかかえている根本的な矛盾や病理を、もつとも先鋭的なかたちで引き受けてしまう。学校や家庭のなかでいまの子どもたちが背負わされている苦しみは、現代文明がわれわれに突きつけてくるもつとも根本的な矛盾を、もつとも純粹なかたちで引き受けなければならぬ苦しみである。言い換えれば、それは「無痛文明」を全身で引き受け、誰の助けもなくそれに打ちひしがれていかねばならない苦しみである。彼らの引き起こす暴力事件や、自傷行為は、無痛文明に押しつぶされそうになりながら、それに対抗しようともがき苦しむ彼らの生命の叫び

である。

そして、この社会に住む大人たちは、無痛文明にどっぷりと浸かってきている。われわれは、自分たちが無痛文明の奴隷となって生命を少しづつマヒさせていることに気づかない。生命がマヒさせられることによって、われわれは生命のよろこびをいつのまにか忘却してゆく。そうして、われわれはわれわれ自身の身体の奴隷になっていくのである。われわれは、快と快のあいだを、ただ憑かれたように往復する。刺激や快適さと引き替えに、われわれは充実とよろこびとを失ってゆく。その先に待ちかまえているものは、いったい何なのか。

無痛文明。苦しみとつらさのない文明。それこそが、現代文明の目指している究極の目標なのではないか。その大きな文明のうねりのなかで、われわれはいつたいどうやって人間としての尊厳を死守すればいいのか。そしてどうすれば身体による生命の支配を逃れ、生命のよろこびを獲得していけるのだろうか。

無痛文明という考え方はじめて思いついたのは、ある看護婦さんの話を聞いたときのことだ。その看護婦さんは、日本でも指折りの高度医療を行なう大病院に勤めていた。彼女の受け持つ集中治療室（ICU）に、高齢の女性患者が運び込まれてきた。その患者は脳に損傷があるらしい。患者にはモニターが付けられ、点滴で栄養と薬剤が投与され、温度管理された部屋のなかできめ細やかな看護が行なわれた。患者はさいわいそれ以上症状が重くなることはなく、安定した状態にはいった。しかし、看護婦は看護をしながら、なんともいえない気持ちになった。身体を拭いたり、体を交換するたびに、「私たちはいったい何をやっているのだろうか」と疑問に思った。

というも、その患者にははっきりとした意識がない。だけれども死んでいるわけではなくて、「すやすや眠っている」状態なのである。適切な治療と看護をほどこしているから、患者はとてもしあわせそうに、いつまでもすやすや眠っている。おそらくもう目覚めて起きてくることはないであろう。このままずっと、栄養と薬剤の点滴を受け、看護婦のきめこまやかなケアによって身体は清潔に保たれ、温度と湿度を快適に管理された部屋のなかで、ただ気持ちよく眠り続けることであろう。

身体を取り巻く環境を完璧にコントロールされ、それに包み込まれるようにして、やすらかな表情で眠り続ける人間。仕事をする必要もない。勉強する必要もない。人生の悩み事もない。めんどろな身の回りの雑事に追われることもない。痛みも、不安も、恐怖もない。それらすべてから守られ、楽で、快適な眠りのなかに居つづけるだけでよい。

その看護婦さんは言った。

「結局、現代文明が作り出そうとしているのは、こういう人間の姿なのではないでしょうか。」

現代文明とは、集中治療室ですやすやと眠っているこのような人間を、社会規模で作り出そうとする営みなのではないだろうか。元氣そうに働き、楽しそうに遊んでいるように見えても、実はその生命の奥底でただすやすやと眠っているだけの、そういう人間たちを、都市という名の集中治療室のなかでシステムティックに生みだそうとしているのではないか。だとすると、いったい誰がそのような戦略を仕掛けたのか。なぜ文明は、この方向へと進んでしまったのか。

2 人間の「自己家畜化」

集中治療室のなかの人間にいちばん似ているのは、家畜工場のなかの家畜である。狭い檻のなかに閉じ込められ、日光や温度などを人工的にコントロールされ、食糧はベルトコンベアによって充分に与えられ、そつやつたただひたすら食べて眠ることが彼らの生になっている、ニワトリたち。

人間は、家畜にしているのと同じことを、人間に対してやってきたのではないか。それをもって文明だと言ってきたのではないか。

これは、人間が自分自身を家畜にするという意味で、「自己家畜化」と呼ばれてきた。自己家畜化ということばは、二〇世紀初頭にアイクシュタットによって提唱された。彼は、人間が人工環境のなかで自分自身を家畜のような状態にしていると考え、その証拠として、人間の身体の形態に、ちようど家畜と同じような独特の変化が起きていることを指摘した。その考え方は、やがてローレンツや小原秀雄らに受け継がれた。

無痛文明について深く考えていくためにも、彼らの自己家畜化論をまず検討しておく必要がある。小原の著書を参考にしながら、簡単に見ていきたい（小原秀雄『ペット化する現代人』NHKブックス（一九九五年）『教育は人間を作るか』農文協（一九八九年）『自己家畜化論』群羊社（一九八四年））。

人間は、約七〇〇〇年前に、野生の山羊や羊を飼い慣らして家畜とした。山羊などは放牧していたが、現代にいたってニワトリなどを小屋の中に監禁して家畜化することをはじめた。ベルトコンベアによって流れてくる餌をただ食べ続けるだけ。ケージに閉じこめられて、運動することもできない

い。まさに家畜工場である。放牧の場合と、家畜工場の場合とではずいぶん違いがあるのだが、小原はその両者に見られる家畜化の特徴を次のように整理している。

まず、家畜は人工環境のもとに置かれる。多かれ少なかれ、人間が管理している空間のなかに囲い込まれて、家畜は生活をする。家畜工場の場合にはとくにそれが著しい。人間が用意したシステムのなかでしか家畜は生きていけない。

第二に、食料が自動的に供給される。家畜は、自分で餌を探してこなくても、飼い主である人間から毎日餌を与えられる。食べ物を自力でとらなくてもかまわない。飼い主に依存していればいい。自分で餌を探す能力も使わなくていい。

第三に、自然の脅威から遠ざかる。たとえば、天敵の襲来や、干ばつや、気候の変動などから守られる。家畜が死んでしまったら人間にとっても大損害だから、人間は家畜をできるかぎり守ろうとするだろう。そのために、様々な工夫を凝らすことになる。

第四に、家畜は人間によって品種改良（人為淘汰）させられていく。たとえば、野生のオオカミは、人間によって家畜化されて、イヌになった。忍耐強く人間の言うことを聞く、新たな種へと作り変えられていったのだ。人間にとってより役に立つような家畜へとたえず改良されるのが、家畜の宿命である。

第五に、家畜は人間によって繁殖を管理される。人間は家畜を品種改良するときに、優秀なオスとメスをかけあわせて子どもを作る。そうやって、子供をたくさん産むブタを作り出したり、乳がたくさん出るウシを作り出したたりする。このような生殖の管理こそが、家畜化の本質であるとも言え

る。谷泰は、生殖と授乳への介入こそが家畜化を成立させたということをも、説得的に示している（『神・人・家畜』平凡社（一九九七年））。

第六に、家畜にされると、その動物は身体の形が変わる。たとえば、イノシシを家畜化したものがブタなのだが、ブタは家畜になって身体の形が変わった。くちさきが短くなり、身体から毛が抜けて脂肪が付いた。牙は退化した。イヌもオオカミに比べて変化している。性周期も変化する。

小原はこれらの点を指摘しているが、私はさらにふたつのことを付け加えたい。

まず、家畜は死のコントロールを受ける。つまり、人間は家畜が予定外のときに死なないように全力でコントロールし、死ぬべきときが来たら強制的に殺す。ブタは、大きくなっておいしい肉が付いてくるまでは全力で生かされ、食用に売りに出されるときに強制的に殺される。家畜に死の自己決定権はない。家畜では、「予期せぬ死」というものは全否定される。死は常に予期されているのである。

次に、家畜と人間のあいだには独特の共犯関係が成立する場合がある。人間が家畜を餌付けするときのことを考えてみれば分かるように、家畜は餌をもらうことと引き替えに、労働をしたり、従順になったり、逃げ出さなかつたり、芸をしたりすることを覚える。家畜は、自発的服従の状態にみずから身を置くことがある。いったんそうなってしまうと、そこから抜け出すのはとても難しいだろう。

ところで、自己家畜化というのは、人間がみずからを、このような家畜の状態に追い込んでいくことである。順番に見ていこう。

まず人工環境化であるが、人間は都市を形成することで、自分たちが生きていく空間を人工環境にしてしまった。家、道路、上下水道、自動車、

電車、電気、そういうものに囲まれてわれわれは生活している。自分の部屋から電車に乗って出勤して、空調のきいたオフィスで仕事をしている姿は、家畜工場の二ワトリとどこか似ている。

次に、食料の自動補給であるが、これも都市に住む人間が置かれている状況である。都市の住人で、自分の食べる食料を山のなかで採ってきたり、海で釣ってくる者がどのくらいいるのか。ほとんどの人は、材料や製品をスーパーマーケットなどで買っている。そうして短時間で調理して食べる。お金があるかぎり、ほぼ自動供給に近い。

第三の自然の脅威についても、人間は文明化の過程でそれを克服してきた。氾濫する河川の整備からはじまって、台風が来ても壊れない住居を發明したり、農作物の大量生産と備蓄によって食料を安定供給する仕組みを開発した。

第四の品種改良についても、人間は一貫してそれを行ってきた。今世紀には優生学があらわれて、優良な人間だけを生んで不良な人間は生まれないようにする政策が、多くの先進諸国で実践された。いまその試みは、ミクロなテクノロジーを利用する形で、姿を変えて進行しようとしている。これについては、のちほどゆっくりと考えていくことにする。

第五の繁殖の人為管理もまた、現代の科学技術が得意とするところである。人工授精、体外受精、出生前診断などによる生殖への介入が、ここ二〇年のあいだ大きな生命倫理の問題を生みだしてきた。それらの技術は、まず家畜で開発応用されてから、人間に転用されたものである。家畜の繁殖に介入して「生命の質」を管理するのと同じことを、現代の医学は人間に行なおうとしている。現代の生殖技術ほど、人間の自己家畜化がストリートにあらわれているものはない（小原が優生学と生殖技術についてまっ

たく触れないのは理解できない。これこそがポイントなのだ）。

第六の身体の形態の変化であるが、小原によると、家畜にあらわれる変化と同じものが、人間にもまた見られる。たとえば、巻き毛・縮れ毛の出現、椎骨数や四肢骨の変化、皮膚の色素の増減などは、人間と家畜だけにかぎって顕著に見られる形態変化である。人間が自分自身を家畜化することによって、人間は家畜動物一般に見られる特徴を兼ね備えることになったというのだ。

では、私が付け加えた二つの点についてはどうであろうか。

まず死のコントロールであるが、現代の文明はあきらかに人間の死をコントロールする方向へと進んできている。老化によって衰弱するまではできるかぎり病気を治し、寿命を延ばそうとし、もうこれ以上延命できないと分かったときには尊厳死や安楽死を認めようとする流れが強くなってきている。「予期せぬ死」の徹底的な排除をめざして文明は進んでいるように見える。「死の自己決定権」の考え方もこの流れの上にある。これについては、またのちほど考えよう。

次に共犯関係であるが、人間は、食料と安定と快適さを供給してくれる社会システムとのあいだに、共犯関係を取り結んでいるように見える。たとえば、地球環境問題がいくら話題になっても、いまの経済成長を下げないかぎりにおいての問題解決しか具体的に出でこないのは、いまの生活水準と安楽さを保障してくれるシステムをわれわれが手放したくないからであり、少々システムに縛られたとしてもその下で生き続けていきたいと、本心では思っているからである。

このように、家畜化の特徴のほとんどすべてが、現代文明のもとで生きている人間にも当てはまるのだ。人間は、みずからを家畜化することによ

つて、文明を立ち上げた。これが自己家畜化の文明論である。みずからを家畜にすることによって、人間は、家畜の安楽さと悲哀とを一身に担うことになるわけだ。小原によれば、現代社会のいじめや管理教育や環境問題などの根本にも、この自己家畜化の問題があるという。

自己家畜化論は、とても鋭い。このような見方で、現代文明を統一的に見ていくことで、いろんなことがクリアに分かってくるであろう。しかしながら、小原は、自己家畜化論の先になにが待ちかまえているのかを、まだ見通していない。それは、小原が、自己家畜化へと突き進むわれわれの「身体」と「生命」の関係について深く考えていないからである。そこを突き詰めて考えることによって、われわれは「無痛文明論」へと導かれていくことになるのだ。

3 身体の欲望

人間が自分自身を家畜にしてきたこと、それが文明の本質だ。自己家畜化論は、そう主張する。たしかにそのように考えると、われわれがこの社会のなかでかかえている何ともいえない不安全感や焦燥感を説明できるような気がする。われわれは人間だが、同時に家畜でもあるのだ。豚小屋のなかで身動きできずに悲しい表情をしているブタ、食料はたらふく与えられているのに生命の輝きを奪われてしまっているブタ。現代社会に生きる人間は、都市という家畜小屋に囲い込まれて、食料と安全を与えられることと引き替えに生命の輝きを奪われてしまったブタなのだ。自己家畜化論は、そのような文明の見方を教えてくれる。

ただ、自己家畜化論はもつとも根本的な点に気がついていない。なぜなら、現代文明のなかで生きる人間の姿が家畜小屋で生かされている動物の姿に「似ている」ということを指摘するにとどまっているからだ。たしかに、いまの人間の姿と、家畜の姿は似ている。そこに着目することで、人間と社会を見るための斬新な視点を手に入れることができる。でも、人間と家畜が似ているというところで止まっていたはダメだ。その先にまで踏み込まないといけない。

その点をはっきりさせるために、人間が自分自身を家畜のようになつたことで、いったいどのようなメリットがあるのかを考えてみよう。まず人間は、生活の場所とそれを取り巻く環境を人工化した。都市を形成して、生活のための必需品が都市に向かって集中するようなシステムを組み上げた。大雨が降っても、寒波が来ても、野生獣がおそってきても、なんとか耐え忍んで生活を維持できるようにした。金銭と引き替えに食料や冷暖房や交通手段が手にはいるようになった。二〇世紀の後半にいたって、先進産業諸国では乳児死亡率が激減し、平均寿命が延びた。少なく生まれた子どもを、途中で死なせることなく、最後まで長生きさせる基盤が整った。住居と食料が確保された人々は、苦痛が少なく快適で楽な生活を求めはじめた。

人間は、自分たちを「都市」という檻に入れることによって、(1)苦痛が少なく快が多い人生、(2)自分の予期したとおりにすむ安定した人生、(3)したいことが多くでき、したくないことはなるべくしなくてすむような人生、を一步一步獲得してきたのである。これが、自己家畜化によって得られるメリットである。それらを手に入れるために、人間はみずから家畜になることを選択した。それを文明と呼んだ。そしてそのよう

な道筋を選ばなかった人間のことを野蠻人とか先住民とか呼んだ。みずから家畜となることを選択した文明人は、その道筋を選ばなかった人間たちを、力によって征服し、支配し、従属させた。家畜となることと引き替えに、他を支配従属させることができたとは、なんと逆説なのだろう。しかし冷静に考えてみればそれは当然なのかもしれない。身体の欲望に負け、生命のよろこびを失った者のみが、他の人間たちをもっとも徹底的に支配し尽くすのである。文明人であろうが、男であろうが、親であろうが同じことだ。

人間は、みずからを都市という檻のなかに入れることで、右にあげた三つのことを徐々に達成してきた。われわれの文明というのは、ようするにこれらを手に入れることをめざして突き進んできた大きなうねりのようなものだ。

苦痛が少なく快が多い人生。痛みや苦しみはなるべくないほうがいい。そして快楽や、快適さや、刺激にあふれていた方がいい。かならずしも強烈な刺激だけを求めているわけではない。気分や状況に応じて、もっとも心地よい快と刺激が得られるような人生。

そして自分の予期したとおりに進む安定した人生。予期せぬ事故にあつて計画がめちゃくちゃになつたりせず、あるいは大切な人を途中で失つたりしない。自分があらかじめ思い描いていたような人生のコースを一步一步達成していけるような人生。いろんなことがあつたとしても、最後にはハッピーエンド、よかつたよかつた胸をなでおろすことができる。きちんと貯蓄をして、老後の生活設計をおこない、決められたことを毎日ひとつずつこなしていく安定した人生。

そしてしたいことが多くでき、ほしいものが多く手に入り、したくない

ことはなるべくしなくてすむような人生。自分の好きなこと、たとえばスポーツや趣味などになるべく多くの時間をさき、したくない家事や仕事はなるべくしなくてもすむようになりたい。そう思った人間たちは、週末のレジャーの時間に自分の意識を集中し、その時間をいかに有意義に過ごすかということに全神経を傾けるようになる。仕事や家事はその週末のレジャーを成り立たせるために黙々とこなしていくべき、自己満足をともなつた労苦となる。ある程度お金ができると、こんどはお金を払って仕事や家事を他人にまかせるようになる。そうやって自分はレジャーに、より多くの時間をさくことができる。あるいは結婚という制度を利用して、仕事や家事を相手に押しつけておいて、自分は好きなことをする時間を確保する。

したいことが多くできるというのは、人間のもつ大きな欲望だ。たとえば電灯が発明されて、われわれは夜になつても読書したり、食事をしたり、遊び歩いたりできるようになった。全自動洗濯機が家庭に入るようになって、われわれはいままで洗濯に費やしていた時間を、自分のための時間にまわすことができるようになった。新幹線や飛行機が登場して、われわれは短時間でより多くの場所に行つて仕事をしたり観光することができるようになった。

われわれの文明を押し進めてきたのは、このような欲望だ。

もちろんわれわれの欲望には様々なものがある。しかしそれら様々な欲望のなかで、いま述べた三つの欲望は、あるひとまとりの根源的な欲望であるように思われる。それは、人間が「身体」をもっているという事実から生まれてくる欲望である。人間は「身体」をもち、その身体にささえられてはじめて生きることができるとして人間は身体によって束縛されている。われわれが痛みや苦しみを感じたときにそれを避けようとしてしま

うのは、われわれが身体をもっているからだ。もし身体をもたずに成長したとすれば、われわれは痛みや快刺激は感じないはずだ。われわれの身体は、基本的には安定を求めている。いまの状態をなるべく長いあいだもっておくことが優先される。外から異物が入ってきたときにはそれを排除しようとする。そして、すぎあれば自分たちのテリトリーを拡大して増殖しようとする。環境条件に余裕があれば、セックスをしてどんどん子孫を増やそうとする。自分たちのコピーを増やしてばらまこうとする。

つまり、われわれは「身体」次元の根源的な欲望をもっている。私はそれを「身体の欲望」と呼びたいのだが、それは(1)快を求め苦痛を避ける(2)現状維持と安定を図る(3)すぎあれば拡大増殖する、という三つのかたちをとってあらわれる。これら三つの身体レベルの欲望が、さきに述べたような、現代文明をつき動かす三つの欲望となつてあらわれているのである。たとえば、快を求め苦痛を避けるという身体の欲望は、苦痛が少なく快の多い人生を現代文明のなかで達成させてきた。現状維持と安定を図るという身体の欲望は、なんとしても生き延びたいというわれわれの生存欲をささえるものであり、現代文明のなかで自分の予期したとおりにすすむ安定した人生を達成させてきた。すぎあれば拡大増殖するという身体の欲望は、他人を支配したいという支配欲や権力欲をささえるものであり、現代文明のなかでしたいことが多くでき、したくないことはなるべくしなくてすむような人生を可能にできた。(私は以前の著作『生命観を問いなおす』(ちくま新書)において「生命の欲望」ということばを使った。しかし、「生命の欲望」ということばはひとまず撤回したい。後に述べるような「身体」と「生命」の対立関係が見えていなかったからだ。) 身体の欲望。自分自身を振り返ったときに、この身体から沸き上がった

くるとしようもない衝動や欲求が見えてくる。理性や良心によって押さえようとしても、どうしても押さえきれない欲望。それは身体の次元から沸き上がってきて、われわれの感情を支配し、理性や良心を眠らせる。そればかりか、みずからの欲望を実現するために、理性を背後から操作して、みずからに都合のいいような理屈を作り上げて良心をごまかそうとする。そのような力を持った「身体の欲望」。

私は、人間の奥底に刻み込まれているところの「身体の欲望」こそが、文明をつき動かすいちばん大きな原動力であると考えている。人類の文明が立ち上がって、自分自身を自己家畜化し、そして無痛文明へと進化してきたその原動力こそが、身体の欲望である。細胞の集積からなる肉体をもつた人間という存在、その行動パターンをもつとも深いところで決定しているのは身体の欲望である。

身体の欲望は、人間個人の内部にあるのと同時に、人間集団や社会の奥底にもあると私は考えたい。人間集団や社会の動き方を深いところで決定している、集合的な身体の欲望があると考えたい。個々人の内部にある身体の欲望は、それと通底しており、お互いに影響を与えあっている。

身体の欲望についてさらに考えてみたい。

「欲望」は、人間が生きていくための最低限の「ニーズ」とは区別して考えるのがふつうである。人間が生きていくために水分を補給するのは、まずは最低限の「ニーズ」なのであって、それだけでは「欲望」ではない。それが欲望に転化するのには、たとえば、水道水ではなくて、「おいしい水」を毎日飲み続けていたいと思つたときである。欲望は人間個人に内在するだけではなく、社会関係によっても強く規定される。

「あれではなく、これが、必要以上にむとほしい」と思いはじめたと

きに欲望がたちあらわれる。現代思想は、欲望の背後に、「もつともつとほしいという拡張運動」があると考えてきた。佐伯啓思は次のようにまとめている。

欲望はたえず新しいもの、刺激に富んだもの、未開拓なものを求めるものだ。こうしてそれは無限に拡張してゆく。欲望は無限に拡張し、フロンティアを広げてゆく運動にほかならないのである。(『欲望と資本主義』講談社現代新書 九二 九三頁)

資本主義の社会では、欲望はこのような運動となつてあらわれる。たしかにそのとおりであるが、「欲望」という概念が指し示しているのはそれだけではない。まず、たんに拡張していくだけではなく、拡張するときに「ほかのものを押しつけてまで」広がっていくという感じがある。他人のものとか、他人の都合とか、あるいは自分自身のほかの欲求などを押しつけてまで「これがほしい」を通していく。そして「ほしい」ものを自分が手に入れていくことによって、自分が際限なく肥え太っていくという感じがある。なぜ肥え太るかという点、自分自身の基本的な態勢はそのまま、内容物のみが増加していくからである。自分自身は変わらずに、ものをどんどん取り入れるからである。すでに手に入れたものは他人にせつたいに取られないように死守する。既得権益を守りきろうとする。さらに、欲望は快と安楽の追求になるが、それはすがすがしい快というよりも、どこか後ろめたい、いやらしい快となる。なぜかといえば、ふつつならば快を得るためにはそれに比例するくらいの上んどさを引き受けないといけないのだが、欲望追求は往々にして、そのようなしんどさを他人に押しつけてお

いて、自分は快の「いいとこどり」をする方向に流れていくからである。身体の欲望もまた、これらの特徴をもっている。ひとこと言えば、身体の欲望は、いまの自分というものを維持したまま、「したい」という気持ちがある他人の都合などを押しつけて拡張していき、快のいいとこどりをして、みずからがぶくぶくと肥え太り、手に入れた既得権益は死ぬまで守り通そうとする、そのような力のことだ。いまの自分というものを維持したまま既得権益は守り通そうとする点に注目すべきである。私が「身体の欲望」と言うとき、そこにかんがりの重点が置かれている。

現代思想は、資本主義というものを念頭に置いて考えるから、欲望のもつ「拡張傾向」を強調しがちである。だが、身体の欲望には、いまのままの自分を変えずに維持したいというものや、快適さと安楽さをむさぼっていたいというものが大きな比重を占める。そのうえで、すぎあらば、いまの自分の基本的な態勢を変えないままで拡張しようとする。「いまの自分の基本的な態勢を変えないままで」というのがポイントなのだ。

人間は、身体の欲望につき動かされて、それを全面開花させるための社会装置を作り上げた。そのときに人間がもちいたのが、外界と人間自身をコントロールするための「コントロール理性」である。コントロール理性とは、あらかじめ予測された枠内にものごとの運行を収めておくような知恵と技術を生み出す能力のことだ。自然環境を管理し、人間自身を管理するための理性能力を人間はもっていた。そして、その能力を、身体の欲望をみたすために使ったのである。そしてその能力を全面開花させていくなかで、人間はみずから家畜となつていった。自己家畜化文明を作り上げたのは、身体の欲望につき動かされた人間のコントロール理性である。

逆に言えばこういうことだ。自己家畜化文明とは、人間のなかにある、身

体の欲望」が、人間のコントロール理性をつまく利用して、みずからの願いを全面開花させるための社会装置を作り上げた文明のことである。身体の欲望が、人間の理性を畏にはめたのだ。そして、人間たちはその畏に落ちて、いつのまにかみずからを家畜へと変形させていった。だから、その意味では、現代文明のなかで生きる人間たちは、みずからの身体の欲望にからめとられ、その畏にはまっているのだ。そしてその畏を畏だと意識することすらできにくくされている。そのなかで、われわれの生命はだんだんと死んでいくのである。われわれは、快のなかで生き続けているが、しかし同時にその生命は死に瀕しているのだ。

身体の欲望が、コントロール理性を利用した。そうやって自己家畜化文明が立ち上がった。コントロール理性は、身体の欲望をかなえるために利用され、実践に用いられ、そして鍛えられる。コントロール理性は、身体の欲望をかなえるために最適化され、知識と技術を生みだし、自然管理型文明の方法論を作り上げる。身体の欲望だけでは自然と人間の管理は不可能である。管理を精密に行なうためには、どうしても理性の助けがいる。コントロール理性と、それをしもべに率いた身体の欲望は、文明形成における最強のペアとなった。

ところで、「家畜化」は「管理化」と深い関係にある。

家畜を維持するためには、人間が徹底的に管理しなければならない。食糧補給から生殖のコントロールまで、あらゆる面で管理が必要だ。人間が人間を自己家畜化した現代文明においても同じことが言える。自己家畜化文明とは、管理計画文明の別名であるといってもよい。自分を取り巻く環境と、自分自身とを、用意周到に管理していく文明。それが現代文明の本質である。文明のモードは、人間が自然を支配する という地点から、

人間が外界と自分自身を管理する という地点へとすでに移行しはじめている。環境危機に直面して、自然支配原理を自己批判した現代文明が、今度は自然と人間の管理型文明へと脱皮しつつあるという事実を、われわれは冷静に認識しておかなければならない。

たとえば、人間が自分自身の管理に向かった場合、それは「医療」や「教育」という形をとる。現代文明においては、医療とはわれわれを「正常」な状態に連れ戻すための管理であり、教育とはわれわれを「望ましい」人間へと育て上げるための管理である。二〇世紀に猛威をふるった優生学は、人間の生命の質の管理である。それは、生殖テクノロジーの進展にともなうて、あらたな生命の品質管理学として完成しようとしている。医療技術と学校については、のちほど詳しく考えることにしたい。

社会環境の管理に向かった場合、まず都市化がすすめられることになる。そして法、警察、行政などをとおして都市住民が管理され、やがては福祉社会の名のもとに個々人の生と死までが、細かい管理の網の目にかかってくることになるはずだ。都市化の延長線上に「情報化」があることは簡単に理解できるだろう。情報化によって情報面での管理もすすむ。

自然環境の管理は、われわれの文明が立ち上がった当初から継続的になされてきたわけだが、現代文明においては地球全体を人間のための庭園にしようという思想と行動となって開花する。持続可能な開発・発展というのは地球環境の徹底した管理ということだし、その延長線上で「惑星管理」ということはさえ生まれている。

このように、われわれの文明は、地球に住む人間や生き物や物質などを一粒のこさず管理しきってやろうという、マグマのような衝動によってつき動かされているということだ。もちろんそのような管理は実際にはまだ

ほとんど達成されていないが、しかしながら、文明が進もうとしている方向がその方角であるということだけは確認しておかなければならない。われわれを否応なしに巻き込みながら文明がそちらの方向へと邁進しようとしているという事実。このどうしようもない巨大な溶岩の流れをきちんとつかんでおかなければならない。そしてそのような文明の流れが、われわれをどのような場所に追い込もうとしているのかを冷静に見極めること。

4 「生命のよろこび」とは何か

自己家畜化文明は管理計画文明の別名であると言った。しかし、自己家畜化という考え方は、単なる管理計画ということを超えた重要な意味をもっている。その点を掘り下げなければならない。動物の家畜化と人間の家畜化が「似ている」という段階を突破できなかった、いままでの自己家畜化論を超える必要がある。

では、「管理化」と「家畜化」はどこがちがうのか。

管理化とは、予測された状態へとコントロールすることである。すべてのものが、予想通りに動くようにすること。あらかじめ予測された枠内にもこの運行を収めておくように知恵と技術をもちいることだ。

これに対して、家畜化ということは、さらに強い意味をはらんでいる。

家畜は、人間による管理化のえじきになっている。しかしそれだけではない。家畜は、自分がいちばん生きたいように生きることを許されていない。ほんとうは狭い小屋を抜け出して、自分の脚を使って思いっきり駆けてみたいのかもしれない。頑丈な脚と筋肉をもって生まれたのだから、自

由にそれを使って走り回り、汗をかき、新鮮な空気を吸い、餌を探して全神経を集中させる、そのような生き方を家畜だっけてみたいのではないか。しかしそれは禁じられている。なぜかと言えば、家畜の生は家畜自身のためにあるのではないからだ。家畜の生は、それを飼っている人間のためにあるのだ。だから、家畜が、自分自身の生のために自分の身体を使うことは許されないのである。

家畜の生は、人間のためにある。家畜が生かされているのは、たとえばその肉がいちばんおいしくなったときに殺されて人間の食糧となるためである。あるいは彼らの毛や皮を人間が利用するためである。その証拠に、まったく使いものにならなくなった家畜は人間によって殺される。生かしかつ続ける価値がないからである。

家畜の生は、人間によって奪われているのである。

家畜化とは、「自分自身の生命を自分のために生き切ること」を動物から奪い取って、彼らの存在を人間のために一方的に利用することなのだ。

つまり、家畜化の本質は「奪い取ること」にあるのだ。家畜化とは、単に動物をコントロールすることではなくて、動物が自分の生命を自分のために生き切る可能性を、人間が一方的に奪い取ることなのである。

誰かがなにかを奪っていく。

家畜化するとは、そういうことだ。

では、ここで人間のことを同じように考えてみよう。人間が人間自身を家畜化することによって、文明が立ち上がってきた。われわれの文明が自己「家畜化」文明であるとすれば、そこでもまた、誰かがなにかを奪っていることになる。人間の自己家畜化文明では、いったい誰が、誰から、なにを奪っていることになるのか。

私はこのように考える。

われわれの文明においては、人間の「身体の欲望」が、人間自身から、「生命のよろこび」を奪っているのである。身体の欲望が生命のよろこびを奪う。

これが自己家畜化のもっとも深い意味である。これが、われわれの住んでいるいまの文明のなかで進行しているもっとも根の深い問題である。われわれの文明のうねりというものを、もっとも根底でささえているところの「身体の欲望」。それが、われわれから、「生命のよろこび」を奪っている。われわれは「身体の欲望」が仕掛けた罠にはまることによって文明人となり、それとひきかえに「生命のよろこび」を徐々に奪われてきた。人間が家畜から「自分のために生き切ることを奪ったのとまったく同じように、「身体の欲望」が人間から「生命のよろこび」を奪ったのだ。「身体」が「生命」を奪い取るということ。「欲望」が「よろこび」を奪い取るということ。これが文明の本質のひとつである。いまの社会を覆っている諸問題は、この深さの次元から再把握されなければならない。

いま「生命のよろこび」ということばを使ったが、それは、人間が自身自身の生命を展開して自分自身のために生き切ることがもたらすところの「これが生きていく意味だ」という実感のことである。たとえば苦難に直面したときに、それをなんとかしようともがき苦しむなかから、いままでの自己を変容させて生まれ変わっていくことがあるが、そのときの自己崩壊と再生がもたらす予期せぬ充実達成感が「生命のよろこび」である。苦しみから逃げずに、自分を変えつつ新たな次元へと突破していくときの驚きに似た達成感である。そのときの、ああ、私は生命という形をとって存在しているのだ、ということを感じることができる感覚である。

苦難に直面したときに、自己の変容をはからずに、外部状況だけを変えようとしたならば、このような生命のよろこびはおとずれない。ここはとも大事な点だ。生命のよろこびがおとずれるのは、苦しみやいやなことやつらいことに直面したときに、そこから逃げようとせず、自分自身のほうを崩壊させ、変容させ、再生させたときである。もしなにかの力や操作によって、苦しみが生じている外部の原因のほうを消滅させてしまえば、ただ苦しみが消えるだけで、自分のほうにはなにもおこらない。ただ安心と安堵がおとずれのみである。

外部の苦しみの原因を次々と消去していくことによって、われわれには、安心と安堵が無限に供給され続ける。そしてそれこそが、身体の欲望がめざしていることなのだ。身体の欲望は、苦しみを減らし、快を求め、現状維持と安定を図ろうとする。われわれの内部にあるそういう身体の欲望が、われわれ自身から、「苦しみのなかから自己を変容させていこう」とするときにおとずれる生命のよろこびを奪い取っていく。その結果、われわれは生命のよろこびの不感症になっていく。それが自己家畜化の真の意味なのである。

身体の欲望を充足させることは、自分という主体になんの変化ももたらさない。タバコが吸いたくなったらタバコを吸う。そのことによって主体に根本的な変化はおとずれない。欲望が充足される前と後で、主体に変化はない。渇きが去っただけだ。欲望とはそもそもそういう性質のものなのだ。ところが、何かの理由でタバコが吸えなくなったり、その人間はじめて大きな壁にぶつかる。タバコを吸って欲望充足するのではなく、そのかわりに自分自身のあり方を変容させて、新たな状況に立ち向かうしなくなる。タバコを吸わないでやっていけるだろうかというおそれを抱

いて、ニコチンの禁断症状に苦しみつつ、タバコに依存せずに精神の揺れや渴きとつきあつていくことのできるあらたな自己を見出していくしかない。「こうやっていままでの自己が崩壊し、新たな自己が再生してくるとき、不意に何ともいえない生命のよろこびがたちあらわれる。

これは、予期しなかったよろこびである。こんな自分があり得るなんて考えもしなかった。苦しみのただなかにいるときには、その先にこんなすがすがしい状態が来るなんてまったく想像すらしなかった。生命はそういうかたちで展開する。

身体の欲望の充足は主体を変容させない。生命のよろこびは予期せぬ主体の変容から生まれる。身体の欲望は、苦しみやつらさを、外部操作によつて目の前から消し去ろうとする。生命のよろこびは、苦しみやつらさを自分が引き受けるプロセスのなかでたちあらわれてくる。ここに決定的な差がある。

生命のよろこびは、創造性をともなうことがある。なにかを創造することができたときに、生命のよろこびがたちあらわれる。私がなにかを創造したとき、その創造した主体である私もまた変容している。創造によって私は変わる。私が変わったときに、生命のよろこびはおとずれる。

身体の欲望は、みずからを維持し、守ろうとする。獲得したものはなかなか手放そうとしない。それらの既得権益を死守しながら、すきあらば増殖してみずからのテリトリーを拡大しようとする。自分は変わらせずに、外部のものを制圧して拡大をはかろうとする。そうしながら、快と安楽を味わい、苦しみを避けようとする。生命はこれとは逆だ。苦しみや限界に直面して自己が崩壊し、そこから予期せぬ仕方で再生するそのときに生命は輝く。生命はみずからをいまのままのかたちで守ろうとはしない。いまの

ままのかたちを崩していくなかからしか、生命は立ち現われない。生命は既得権益を崩していくプロセスのなかであらわれ出る。

生命とは、いまの自分をささえてくれている「枠」そのものを崩して、そこから超えようとするはたらきのことである。枠を超えようとして、みずからをささえるものを捨て去ったときの根源的な不安。もつ、どうしていいかわからない、腰が抜けてしまいそうな不安。自分の気をどこかにそらせて、目隠ししないかぎりもつこの脚では立っていられないような、暗黒の不安。しかし生命はそのような不安とともに輝くのだ。生命とは、

身体に内在しながら、身体を超えようとするものである。生命は、身体からけつして離脱することはできない。しかし、身体という枠を超えてそこから遠い夜空へと超出しようとする。そのたびに生命の力は身体の枠を内側から変容させ、予期せぬ生命のよろこびがおとずれる。新たな身体は、その新たな枠を維持しようとし始めるだろう。しかし生命はその新たな身体の枠を、またふたたび超えようとする。その絶えざる、無謀な試みの連続こそが、生命なのである。われわれが生命をいだいているかぎり、われわれはそのような試みから無縁ではあり得ない。無痛文明のただなかにおいても、われわれはそのような試みから無縁ではあり得ない。

生命のよろこびは、私が得ようとして得られるものではない。苦しみとつきあつて私を変容させてゆくなかで、予期せぬ形で私に訪れるものなのである。求めようとして得られるものではなく、まったく予期せぬときに、予期せぬ形でおとずれる。これは大事な点だ。求めようとして得られた充実感とは、「達成感」であつて、「よろこび」ではない。

いまの自分を保つたまま、ある課題に挑戦し、それを克服するなかで生き生きとした充実感が内面からわき上がってきた場合、この感覚を「よろ

「こび」と表現することがあるが、それは私の言う「生命のよろこび」ではない。それは、単なる達成感がもたらす活性化と高揚感にすぎない。「生命のよろこび」とは、苦しみやつらさと立ち向かって自己崩壊と再生をくりぬけたときに、予期せぬ形でおとずれるものである。「生命のよろこび」がおとずれた前と後では、「自分」が根底から変化していなければならぬ。「生命のよろこび」は、往々にして達成感や高揚感と誤解して受け取られがちであるが、この点はしっかりと区別する必要がある。

同じようなことだが、自分を変革したり変容させることで、生命の充実がおとずれるという考え方があろう。しかし、それが私の言う生命のよろこびと同じであるかどうかは慎重に考えないといけない。いまの自分自身を基本的には保持したまま、それが肥大する形で自己変革したり変容することがもたらす充実感だとしたら、それは「生命のよろこび」ではない。だから、自分がただ成長して変わればよいというものではない。瞑想して、宇宙の息吹を感じて自己変革すればいいというものでもない。ニューエイジの「私が変われば世界は変わる」という考え方に単純に乗って、私の言う「生命のよろこび」を理解することは危険性をともなう。

* 自己崩壊と再生のなかから生命のよろこびがおとずれると言ったが、これはカルト宗教などにおける洗脳のプロセスと似ているように見えるかもしれない。しかしながら、洗脳の場合は自己崩壊と再生を誰かが意図的に外から誘導する。自己崩壊させたあとで、あらたな価値を再注入したり、リーダーのしもべにしたりして、外からプログラムミングする。このときにもたらされる安堵感は生命のよろこびではない。生命のよろこびがおとずれるとき、それは、私が自分自身で自己

を崩壊させ、そのあと自分の内側から湧き出る力によって自分自身が変容して再生したときである。外部からの誘導ではなく、みずからの意志と必然性によって、自らに忠実に自己変容したときにおとずれるものが生命のよろこびなのである。

5 苦しみを無化する手法

では、自己家畜化についてももう一度考えてみる。

自己家畜化文明とは、われわれの身体の欲望が、われわれから、生命のよろこびを奪い取っていくということが社会システム化された文明のことである。われわれの住んでいる文明は、このような意味での自己家畜化文明へと突入しはじめている。その徴候を、われわれは社会のあちこちに見出すことができる。

しかし自己家畜化文明はさらに次のステージに向かって展開しようとしている。無痛文明である。無痛文明とは、身体の欲望による生命のよろこびの搾取が、システムのなかに整然と織り込まれた文明である。ここでは、苦しみやつらさというものが巧妙に排除しつくされている。そこにはもはやわれわれの存在を心底から脅かすような本物の苦しみというものは存在しない。

もう一度振り返ってみよう。

自己家畜化文明は、(1) 苦痛が少なく快が多い人生、(2) 自分の予期したとおりすすむ安定した人生、(3) したいことが多くでき、したくないことはなるべくしなくてすむような人生をわれわれに約束する。そ

の背後にはわれわれ自身の「身体の欲望」がある。自己家畜化文明がこの方向に徹底してすすんでいくと、いったいどうなるのか。

そこでは、われわれの苦しみやつらさ、予期しなかったような本物のハプニング、自分のしたくないことなどが、われわれの人生から徹底して排除されることになるはずだ。

そのような本物の異物が、われわれの人生からきわめて用意周到に排除された文明こそが、無痛文明なのである。自己家畜化文明は、無痛文明へと進化する。無痛文明は、われわれの将来に待ちかまえている甘い罠である。

無痛文明では、苦しみや、本物のハプニングや、自分のしたくないことなどが徹底して排除されると私は言った。しかしながら、ことはそれほど単純ではない。

想像してみればすぐにわかることだが、苦しみや、ハプニングや、自分のしたくないことがすべて完璧に排除されたような世界に住んでいて楽しいだろうか。苦しみがまったくなく、予期したとおりにものがすすんで、自分のしたいことだけをしていればよいという世界にほんとうに住んだとしたら、人間はどうなるか。そういう世界では、人間は生きることによって飽きてしまうだろう。完全な予定調和だけですむ世界では、最初は全能感が楽しいかもしれないが、そのうちにだんだんと生きることがつまらなくなり、生きる意味を失ってしまうにちがいない。

無痛文明の基本は、苦しみや、ハプニングや、自分のしたくないことが排除されることであるのだが、しかしながら、そのうえにもうひとつ巧妙な仕掛けが組み込まれている。無痛文明の世界においては、文明の基盤と自分自身の存在を崩さない程度に薄められた「苦しみ」や、「ハプニング」

や、「自分のしたくないこと」を、われわれ自身が選びとれるようになっているのである。

たとえば、ただ無意味に苦しんでのたうちまわるのはいやだけれども、「歯を食いしばって苦しみに耐えてがんばったあとで味わう勝利のよろこび」というシナリオは、無痛文明ではあり得るのだ。勝利のよろこびのために、いまここで自分の意志で苦しみを味わうということ、無痛文明はむしろ奨励する。予定調和に至るための苦しみは奨励される。無痛文明の世界においても、このような意味での苦しみは立派に存在するのである。

無痛文明で排除されるのは、苦しんでがんばったけれどもなんのかいもなく敗北してしまつて、結局は得ることが何もなかった、というシナリオである。貧しいなか、苦しみながら歯を食いしばってがんばったけれども、すべての事業に失敗し、自分の人生を悔やみ、ぼろぼろになつてひとり無惨に死んでいった、というシナリオである。そのような苦しみ、言い換えれば「本物の苦しみ」「苦しみそれ自体としての苦しみ」というものが、無痛文明の世界から巧妙に排除されていくわけである。それを排除するために、社会福祉という名の公的援助と、ボランティアという名の私的援助が、目を光らせてそういう人々を救いにいこうとするのである。

「ハプニング」や「自分のしたくないこと」についても同じことが言える。無痛文明のなかで流行するのは、本物の冒険ではなく、仕組まれた冒険である。思いもかけないことや、予期しないことが襲ってくるのだが、それによって自分がいきなり死んでしまうようなことがないような冒険。ちょうどデイズニールランドのアドヴェンチャーのように、いくら思いがけない洪水が襲ってきたとしても、水しぶきがかかるぐらいで、自分たちの乗っている船が沈んで全員が死んでしまうようなことは絶対に起こ

らない、そういうふうにあらかじめ仕組まれた冒険。そのような冒険が、社会の隅々に、様々な商品やファッションや行動の選択肢としてたえず仕掛けられ続けていくような文明。事故が決して起こらないように監視された空間で行なわれるゴーカート遊び、結婚制度というものを死守したうえでなされる「不倫」ゲーム。そういうたくいものがあちこちにあふれるのが、無痛文明の基本的な光景である。

無痛文明においては、苦しみやつらさというものは、われわれがみずから選びとることのできる選択肢としてのみ存在する。そこではどうしようもない苦しみに襲われるということはない。苦しみは、つねに、われわれ自身によって選びとられるのだ。いわば、文明の基盤をこわさない程度にまで薄められた「刺激」「趣味」として、社会の側から選択肢として提示されるのである。無痛文明は、自己家畜化文明のいわば進形として徐々に拡大していく。無痛文明とは、「本物の苦しみやつらさ」を「選択肢としての苦しみやつらさ」へと果てしなく内部化していく運動のことである。

たとえば、人間の死に際において「安楽死」や「尊厳死」を求める運動が広まっているが、これこそが無痛文明へといたるひとつの筋道である。「終わりよければすべてよし」とは、予定調和をめざす無痛文明の標語である。千年に一度くらいしか洪水のおきない河川管理をめざす一方で、その上流では冒険という名のもとにカヌー遊びを行なおうとする人間の発想こそが、無痛文明を押し進めるのである。

無痛文明が、本物の苦しみというものを内部化し、無化していくやり方として、「存在抹消」「目隠し」「解毒」「予定調和」がある。それらの手法を駆使することによって、無痛文明は本物の苦しみというものを消し去ったり、無化したりするのである。

まず「存在抹消」であるが、これはいちばん単純な方法だ。苦しいことやつらいことがあったとすれば、その苦しみやつらさの原因となっているものを消滅させればよい。たとえば、手のかかる老人の世話を毎日しなくてはならないのが苦しいのならば、その老人をこっそりと殺してしまえばいい。誰にもわからない方法で、消滅させればいい。そうすれば、苦しみの原因が消える。あるいは、出生前診断によって胎児が重い障害をもっていることがわかったとき、そのことがとても苦しいのならば、人工妊娠中絶をして胎児の存在を消してしまうことができる。出生前診断は、いまや妊娠した母親の血液検査によっても可能だし、あるいは体外受精で得られた受精卵の段階でできるようになっている。苦しみを消していく基本は、苦しみの原因の存在を消していくことである。無痛文明では、その仕組みが高度に発達する。

どこまで発達するかと言えば、いま存在する苦しみの原因を消すだけでなく、これからわれわれを襲うであろう苦しみやつらさをあらかじめ用意周到に予測しておいて、それらを将来生み出すことになるであろうものごとをあらかじめ予防的に次々と存在抹消していくのである。われわれの人生に立ちほだかるかもしれない本物の苦しみやつらさの原因となるものを、あらかじめ予測しておいて、次々と予防的に消去していく。そのようなテクノロジーと社会システムが高度に発達する。そのシステムに乗っているかぎり、われわれはけっして外部には出会わない。目の前はいつまでもクリーンで、調和している。こうやって社会が隅々まで 予防的に無痛化されていくのだ。予防的無痛化こそが、このような社会での基本政策となる。

存在抹消のひとつの変形として、苦しみの原因を、自分の見えないとこ

るに追いやるという手法がある。たとえば、手のかかる老人を山奥の老人施設に追いやってしまう。そうすれば、日々の生活世界からは消えてしまっただけで、もう老人の世話で苦しむことはない。新宿都庁前通路や上野にいたホームレスや外国人労働者たちは、いつのまにかどこかほかの場所へと連れ去られていった。これも同じだ。目の前から排除して、どこかへ追いやること。

もちろん、存在抹消したり、遠くへ追いやったりしても、自分たちがそういうことをしたのだという記憶が残っていれば、それに悩まされてしまう。そしてその記憶があとあとまでこの苦しめることになりかねない。それを避けるためには、存在抹消したり、遠くへ追いやったりしたあとで、そのこと自体を記憶から消すことが必要となる。そしてわれわれは、しばしば自分の力でそれらの記憶を消す。これが「目隠し」のはじまりである。自分で自分に目隠しできれば、老人を山奥に追いやったことを忘れて、友だちとたのしく遊びに出かけることができる。そうすることで、目の前の苦しみが消えていく。

前著『宗教なき時代を生きるために』（法藏館）で、私はこのことを「目隠し構造」と呼んだ。目隠し構造とは、目の前の苦しみを避けるために、自分のまわりに目隠しのための幕をはりめぐらし、そして自分の仕掛けたその罠にみずからすすんではまっていくことである。目隠し構造はわれわれのまわりにすでにあふれているが、無痛文明においてはさらに洗練されて拡大していくであろう。

目隠しがさらにすすむと、目の前に「見ているのに見えない」というところまで至る。たとえば、『宗教なき時代を生きるために』で、地球環境問題を語りながらタバコを道路脇の溝に捨てる人のことを紹介した。そ

の人の場合、自分がいままさにタバコを溝に捨てて環境を汚している、そしてその行為を自分自身で見ているのだが、しかしながらタバコを捨てるという行為と自分の主張するエコロジー思想とが矛盾しているという点が見えていないのである。

さらに言えば、この人の場合、自分のしていることと言っていることが矛盾していることを実は知りつつも、それに「気付いていないことにしている」のかもしれない。J・ハーマンは『心的外傷と回復（みずす書房）』のなかで、知っているのに知らないことにするダブルシンクというところの働きについて述べているが（同書、一三二頁以降）、これはその良い例だろう。

「見ているのに見えない」という状況を、ほとんどの人はおそらく一度は経験したことがあるのではないだろうか。目の前にそれがあるのだけれども、そんなものはないんだと自分に言い聞かせる。それを続けていると、しだいに、ほんとうにそんなものは目の前にはないかのように思えてくる。それがすすんでいくと、目の前にほんとうは見えているのだけれども、見えていないという心境にいたるのである。これは、実際に見えていないこととはまったくちがう。目の前にそれがあるかと聞かれれば、「そんなものはない」と自信をもって答えるのだが、答えながらも実はその答えが嘘であることを意識のどこかではつきりと知っている、そのような状態なのである。

比喩的な例を出すと、部屋の真ん中に大きな汚いゴミ袋がある。でも、私はそのゴミ袋を見るのがいやなので、それが無いと思おうとする。すると、ゴミ袋が見えているにもかかわらず、それがあたかもないかのように思うことができるようになる。そして、しだいにゴミ袋が視野に入っても